

熊本大学学術リポジトリ

Kumamoto University Repository System

Title	祝辭
Author(s)	中川, 元
Citation	龍南會雜誌, 60: 1 - 2
Issue date	1897-11-05
Type	Departmental Bulletin Paper
URL	http://hdl.handle.net/2298/4918
Right	

祝 辭

本日は本校第七期創業記念日の佳辰にして、この校舎は聖澤のあまねくかゝれる所、またこれ有志の心血を注ぎし所、一草一木、見るものとして、記念の物ならざるはなま、その初を思へば、苦心慘澹、夙夜寢ねず、協議に協議を加へて、制可を得、始て茲に此の輪奐の美をいたしゝなり。爾來七年の星霜を経、學徒日に集り、校運月に進み、白川の水はその名にながれ、龍山の花はその色に匂ふ。人誰か諸聲を擧げて、祝はざるべき。抑古人云ることあり。君子は弓射るが如し。こゝに毫末の差あれば、かれに尋丈の違ありといへり。苟この校にあるものにして、聊の心違あらんには、いかでかこの隆盛を百年の後までも保つことをうべき。故に始終一節進みて退らざるは、その始を忘れざるにあり。畏くも我邦の大道は、祖宗の遺訓なり。世々その美を濟せるは、その始を忘れざる故ならずや。これ豈學校のみならむや。諸子入學の日は即諸子志業の記念日にあらずや。去らず郷關を出て校門に入る。いかなる心地やしけむ。日重り月積れば、自内に懈を生ず。内に懈れば、必外に顯る。深夜これを寢覺に思はば、惺然として懼るゝ所なきにしもあらじ。今や百般の事業四方に起り、國家の賢材に待つ所、誠に急なり。而してこの賢材を出すは、これ學校の任なり。賢材は金銀銅鐵なり。茲

に鑑みて、慨然たり。これを鑑軸にかけて、吹分け焼直し、貴賤大小、その器を造り、以て國家の需に應せんには、先その地がねをよくし、粗をすてんことを務とせざるべからず。刀劍に一點の穴あり、一日見ざれば、錆忽出つ。人その地金のよく、そのきたひの精ならんことを欲する。豈その故なからんや。老子云、万物の總は皆一穴より闕し、百事の根は皆一門より出づといへり。即、賢材は精鍊の日本刀にして、それ始を忘れずの門より出でん歟。諸子これを思へよ。終に臨で、更に歌はむ。

輪奐其美、四方所瞻、勿忘其始、聖澤所霑。

明治三十年十月十日

第五高等學校長中 川 元

祝辭

本日本校創業の紀念日に當り、我等も聊か所感を述べ、并せて諸子に告げ、以て今日の祝詞とせむ。夫れ教育は建國の基礎にして、師弟の和熟は育英の大本たり。師の弟子を遇するを、路人の如く、弟子の師を視ると、秦越の如くんば、教習全く絶えて、國家の元氣沮喪せむ。諸子笈を負て、斯校に遊ぶ、必ず當に校舎を以て晉家となすの覺悟あるべきなり。若然らず、之で放逸喧擾妄に校紀を紊亂せば、我其心と學校との間、白